

提案主題 小中連携を生かした子どもの発達支援と教頭の関わり

協議の柱 小中連携における教頭の関わりはどうか

提言者 姫島村立姫島小学校 田川勝樹

1 質 疑

- (1) Q ①学校規模はどれくらいか、②中学年「ふるさと科」「外国語科」の85時間をどう捻出しているか③かにつ子塾はまだ実施しているか。
A ①6学級で職員数12名(教育困難校1、主幹教諭1を含む) ②特活15時間と総合70時間を「ふるさと科」に50時間、「外国語科」に35時間に割り当てている。③継続している。
- (2) Q 教育目標や組織を小中で一致させるのは大変では。また、学校評議員会は小中合同か。
A 小中合同は教育委員会の強い意向。小中の連携は可能な限り行っている。主幹教諭がよくリーダーシップを発揮している。学校評議員会は別々開催。

2 協 議

- (1) 教頭の役割は全体をレイアウトすること。小中連携は主幹教諭がキーパーソンなので教頭は主幹教諭にどう関わっていくかがポイントである。教頭はビジョンのすり合わせや会議の開催等について校長と主幹教諭との連絡調整を行う。小中の教頭同士の連携も必要である。
- (2) 中学校区に複数の小学校があるところは連携が難しい。また、学校間の距離が離れているのも難しい。異校種の違いを理解して協働していく。
- (3) 中学生が小学生に勉強を教える活動は小中の交流が深まり有効な取組である。また小中での互見授業もそれぞれの指導法がわかり有効である。
- (4) 複数の小学校のあるところは研修や乗り入れ授業等の日程調整が難しい。
- (5) 学習のきまりを小中で話し合い統一した。9年間を見越して指導。
- (6) 小中連携フォルダを設置している。有効である。
- (7) 小中連携は共通理解していないと日々の多忙を理由に取組が進めていけない。プラス思考で取り組んでいく。

3 指導助言

- (1) 最初にハードでこれからソフト面の取組を行っていく。まず組織や部会などの形を整えてから小中の連携の取組を行っていく。
- (2) 連携にあたっては何が子どものためになるのかを考え、9年間を見通したカリキュラムを作成している。人づくりのためには9年間という長いスパンが有効である。
- (3) 子どもたちの発達段階を踏まえて、学びの段階や指導の方向性を考えていくことが大事である。主幹教諭等のミドルリーダーへアドバイスしていくことが教頭の役割である。
- (4) 県教委等から出された通知等を主幹教諭や教務主任等のミドルリーダーへ伝え、周知徹底していくことが大事である。